

諜者報告にみえる明治7・8年の教会

— 耶蘇教徒取調一件書類の紹介 — 【史料紹介】

塩 入 隆*

On Christian Church at the Beginning of Meiji (1874~75) viewed from the Reports by a Certain Spy

Takashi Shioiri

明治初期の日本プロテスタントは、近代日本にかかわる要素として大変重大である。ある意味では、自由民権運動と並ぶ近代日本の前衛であり、また、トラブルメーカーでもあった。今日プロテスタント史は、大要三側面から問題にされている。すなわち①新教史そのものの研究、②ハリス外交以来一貫して存在する信教の自由をめぐる外交問題、③近代日本の形成とプロテスタントの関係、の三つである。三条家文書を調べているうちに、「東京耶蘇教事情(明治八年一月第五号)」のあるのに気づいたところ、恩師藤井貞文博士は、同種のもが宮内庁書陵部にあることを教えて下さった。その史料は「耶蘇教徒取調一件書類」と題する和綴三冊本で、カトリック教徒・プロテスタント教徒相方の取り調べに関する報告書を集めたもので、同書中に「東京横浜耶蘇教事情」第二号、第八号及び第十一号も収録されていた。これらの筆を前述の「東京耶蘇教事情第五号」と比較したところ、同一人の筆跡と認められた。宮内庁書陵部所蔵の「耶蘇教徒取調一件書類」は、三条公行実編輯掛引継本で、国会図書館憲政資料室所蔵の三条家文書とは深い関係にある史料である。本書に収められた史料は一種の密偵報告であり、とりわけ上述の第二号、第五号、第八号そして十一号の「東京耶蘇教事情」は同一諜者の報告である。諜者報告は早稲田大学の大隈文書の中にあり、これに関しては小沢三郎氏の⁽¹⁾研究が全てを尽しているが、「耶蘇教徒取調一件書類」中の諜者報告は、三条実美の手元に残された密偵報告であり、明治7・8年のプロテスタント教会の内情を知る貴重史料なので、斯学のために公にすることにした。本史料紹介は、「耶蘇教徒取調一件書類」中のプロテスタント関係のものだけに限定した。

明治初期の日本基督公会には安藤劉太郎・正木護の密偵(諜者)が信者になりすまして潜入したことは知られている。⁽²⁾しかしこの両人は明治七年頃には教会に出席していないと思われるから、⁽³⁾「東京耶蘇教事情」は又別人の報告かと思われるが、今後すくなくとも第一号、第三・四・六・七・九・十号が発見され、そこに署名があれば諜者某が誰れであり、教会に出席したときの偽称が何某か判明するかもしれない。

註(1) 小沢三郎著「幕末明治耶蘇教史研究」(亜細亜書房昭和19年)を参照されたい。又、諜者伊沢道一の報告に関しては、雑誌「明治文化」10号・11号・12号に小沢三郎氏が史料紹介されている。

(2) 小沢三郎著「幕末明治耶蘇教史研究」P 319 以下参照されたい。

(3) 安藤劉太郎は明治五年九月十三日日本願寺法主および島地黙雷等に随行して外国に出かけている。したがって彼の報告は五年中で終わる。

正木護の諜者報告は現在明治六年四月以降のものを見ることが出来ない。明治六年二月に切支丹禁制の高札は撤廃され、同十月には「諜者一同職務御免願」(小沢三郎幕末明治耶蘇教史研究P 335 参照)が出されており、桃江正吉(正木護)は正木護隆瑞に還元したらしい。「新栄教会六十年史」には明治六年以降の信者の名簿があり、その中に桃江正吉の名前はみえるが、公会記録にも、本稿で扱う諜者報告にもその名前は一度も表われてこない。もう一人仁村守三も諜者であつたという。(小沢三郎日本プロテスタント史研究P84参照)仁村は明治8年3月、長老に撰任されたが固辞している。

以下の年表は「東京耶蘇教事情」を使用して明治7・8年のプロテスタント教会史に若干の事実を付け加えたものである。本稿史料の位置を明らかにするため掲げた。

*本年表は1964年3月プロテスタント史研究会で行なった「密偵史料からみた明治7・8年の教会」なる報告の際に使用したものの一部である。

日 時	事 項	出 典
7年 1月 4日～	公会初週祈禱会を持つ	
1 16	基督公会、宣教師に手紙を送り公会主義に援助を求む	山本、教会史
1 18	東京公会の出席70余名	新栄、60年央
4 19	神戸公会設立	正久と時代
5 月中	文部省官立学校学生の教会出席を禁ず	教会新聞
5 24	大阪公会設立	正久と時代
7 5	横浜へボン英学校生受洗	山本、教会史
8 24	伊藤庭竹死亡、キリスト教式葬儀	〃
9 12	津田政左衛門等8名箱根でバラより受洗	第2号
9 13	横浜長老教会設立	山本、教会史
9 19	東京・横浜公会会議 出席52人	第2号
9 月中	庭竹の葬儀で戸長が倅定右衛門(?)を尋問	第2号
10 1	東京で宣教師会議(大阪、神戸より4人出席)	第2号
10 2	横浜で 〃	第2号
10 2	教部省、東京府へ伊藤庭竹葬儀弾劾の件を差廻す	教部省達
10 3	日本基督公会会議 90人出席 プラインの学校。神戸前田泰一、大阪高木玄真出席	第2号及山本教会史
10 4	押山復録等10人タムソンより受洗	第2号
10 18	東京第一長老教会設立	正久と時代
12 7	東京裁判所伊藤庭竹葬儀につき奥野昌綱、小川義綏を呼出す	山本、教会史
12 8	兩人出頭	〃
12 9	兩人連署にて始末書提出するも却下さる タムソン抗議書提出	外務省史料 〃
12 11	葬儀参加をめぐつて裁判所と兩人の間で紛糾	〃
12 17	北原義道、押川方義等4人庭竹葬儀の件につき東京府へ抗議	正久と時代及第5号
12 20	同上4人東京府へ呼出され、真意を確かめられる	山本、教会史
12 28	教部省却下(書面差戻し)の由を東京府、北原へ口達	第5号
8年 1月 3日	新島襄、築地会堂で説教 この日より初週祈禱会	正久と時代 第5号
	戸川安宅等5人受洗(タムソンより)	第5号
1 4	東京第一長老教会長老会	比較史料(1)
1 11	エバングリーアライアンスの日本集会は庭竹葬儀の件で宗教の自由を求めて抗議す	外務省史料
2 7	英公使パークス、同上事項を日本政府に抗議	〃
3 22	東京公会会議	第8号

3 23	外務卿と英公使接見, 信教由自につき討論	外務省史料
3 25	東京公会会議	第8号
3 29	外務省, 司法省へ庭竹葬儀の件問合せ	外務省史料
4 5	司法省, 外務省へ返答	〃
4 6	東京第一長老教会長老会	比較史料(1)
4 8	英公使と外務卿信教自由で対談	外務省史料
4 10	外務省, 太政大臣へ庭竹葬儀の件報告す	〃
9 29	鈴木孫四郎改宗届を静岡県参事へ提出	栢陰文庫史料
9 24	伊藤庭竹葬儀の件判決	教部省達
9 28	東京裁判所教部省へ報告	〃
10 5	東京第一長老教会長老会	比較史料(1)
10 6	日本基督公会会議 於横浜	〃 (2)
10 16	同上再会議	〃
10 19	教部省庭竹葬儀の一件判決を神仏各宗管長に達す	教部省達
10 23	公会会議 (16日の再会)	比較史料(2)

㊦ 出典中 「正久と時代」とあるのは「植村正久とその時代」佐波巨 第2巻である。

「山本, 教会史」は, 山本秀暲著「日本基督教会史」

「新栄60年史」は, 山本秀暲著「新栄教会六十年史」

第2, 第5, 第8は東京耶蘇教事情第2, 第5, 第8号の略。

比較史料(1)は, 東京女子大学比較文化研究所蔵の「第一長老教会長老会記録」同(2)は同所の「最初の中会記録」を指している。

史料 I

東京横浜耶蘇教事情第二号 明治七年十月

一 英國伝道者兼医師フールス氏去ル八月ヨリ府下芝新銭座三番地佐野諒元ノ宅ニ月曜木曜ノ両日毎ニ午後二時ヨリ出張珍察施薬ノ條ニツキ東京府ニ出願セルトコロ屢ヒ入ニ非サレハ許容相成ラストノ事ニテ近頃栗津高明(海軍兵学寮奏任出ノ者耶蘇教会中巨魁ノ一ナリ)種々盡力奔走シ府掛リノ官員ヘモ応接シイヨイヨ六ヶ敷ハ外務ニ持出シ終ニ許可ヲ得ント外務省長官ヘモ内々申出コレアリト云々又米口伝道兼医師バーム氏ハ本所相生町ニ珍察場ヲ開キ水曜日毎ニ出張シ謝儀ヲ要セス珍察施薬セリ未タ官許ノ手續キヨシラス此等ハ皆医業ヲ本トスルニ非スコレヲ楷梯トシテ其本意教義ヲ弘メントノ術ナリ故ニ其薬價其余ノ出費ハ皆本口教会ヨリ運輸セリルレモ今ニ於テ一切施薬ト云ハム他ノ嫌疑アルヲ以テ貧人ハ施薬富有ハ随意ノ謝ヲ取ルノ則ヲ設ケタリ些細ト雖トモ其意ヲ用ユル勤メタリト云フヘシ且又右兩人築地本宅ニテモ毎日珍察施療ス毎日来ルノ病者凡三十人内外日々増殖スルナリ

一 九月十九日ハ京濱ノ會徒築地六番ノ会堂ニ會議セリ(教会規則中春秋両度集議ノ則ヲ守ルナリ)互ニ事情ヲ述ヘ春已來進歩ヲ神ニ謝シ已后ヲ祈禱シ弘法ノ策云何スヘキ乎ヲ共和談合スル其大旨ナリ此日ハ午前九時ヨリ午後五時マテ會徒集ル者五十二人議長タムソン筆記者高橋享ニテ初ニ公会規則ノ事ヲ議セリ夫ニ付キ議論沸騰區々ニシテ不形付遂ニ來ル十月三日横浜ニ再会スヘシト約定シテ去リヌサテ十月三日再会ノ日ナルヲ以テ外國傳道教師ハ殊ニ議評スヘキ事件アツテ十月一日東京ニ會シ同日横浜ニ會シ神戸大坂ヨリモ四人ノ傳道師來リ弘法ノ便宜且日本所立ノ公会ノ条例等ニ就キ種々弁論アリ而シテ翌三日横浜二百十二番女教プラインノ学校ニ惣會セリ此日集ル者凡九十人神戸公会ノ惣代理前田泰一大坂公会ノ代理高木玄真ナリ先始メニ公会規則ノ条ヲ一同議評ノ上ニテ日本基督公会条例ヲ定メ不日梓行シテ各会同盟ノ衆ニ配賦スヘシト。次ニ議長

命シテ云ク今日集会ノ衆人ノ前ニ於テ各会ノ事情進歩五ニ知セテ従前ヲ感謝シ將來ヲ策励スヘシト茲ニ於テ先東京公会ノ長老小川義綏進テ東京公会ノ進歩傳道ノ事情逐一ヲ演説セリ其次ニ横浜長老奥野昌綱云ク当三月ヨリ受洗礼入会ノ者三十六人アリ又会中ニ於テモ何ノ障リモナク追々進ミ日曜日毎ニ本町通り六十八番ノ会堂ニ集ル者モ多クナリ其外太田町二丁目羽衣町一丁目馬車道石川口并ニ金川都合五ヶ所ニ教場ヲ設ケ或所ハ各夜或所ハ一周ニ二度ツ、諸教師諸兄弟尽力シテ日ニ増シ盛ニ相成リ尚当夏ハ会中ノ者所々ニ手ヲ分チ上總下總日光辺八王寺小田原静岡辺込伝道ノ為ニ遊歴シ中ニ於テ日光海道タマニフ村杯ニハ余程耳ヲ傾ケルノ徒アリ又箱根ニハ一時盛ニ集リ聴ク人アリテ県内乎又中教院ヨリ敷少々防ケアリテ来集ノ人減シタレト遂ニ箱根山中両駅ノ間ニ御道ノ種ヲオロシ真ノ耶蘇ノ徒受洗禮ノ八人ノ初穂ヲ得タリ来春迄ニハ彼地ニモ公会ヲ立ツルニ至ルヘシ又小田原厚木辺ニモ聞人多クアリ尚今ヨリ教師并ニ公会中ノ力ヲ盡シ交代シテ出張ノ覚悟ナリト云々其後種々ノ演説竟リテ次ニ神戸長老前田泰一進テ事情ヲ述テ云ク神戸ハ京浜ニ後レ漸ク本年四月公会ヲ立テ信者モ至テ少ク實ニ京浜ノ公会ニ比較スル能ハザレト近來ハ道々道ヲ聞ク人モアリ安息日コトニ説法ヲ聴ク者凡ソ八九十人中ニハ信仰スル者モ出来何卒早ク繁榮センメント既ニ道ニ入ル者ハ常ニ祈念ヲ込メ身ノ不省ヲ問ハス今日聞テ明日ニ説クノ志ヲ起シ且又教師ベレー氏ハ兼醫師ナレハ神戸ヲ去ル五里ニシテ明石ト云ヘル所明石ヲ去ル五里ニシテ加古川ニ一ヶ所加古川ヲ去ル五里ニシテ姫路此ノ三所ニ病院ヲ設ケ時々出張シ緩漸ニ法教ノ咄ヲ為シ明石ニハ日曜日毎ニ説法ヲ始メタリ又当夏已來神戸ヲ去ル八里ニシテ摂州三田ト申ス所ト又有間ト申ス処ニハ教師テベス氏時々出張アリテ家宅ヲ借受ケ教場ヲ開キ日曜日毎ニ講義セリ凡ソ七八十人ツ、ノ聴衆アリテ洗礼ヲ望ム者六七人モアリ来月ハ授洗ノ積リナリ如是神戸モ不日開ケ就テハ東京横浜ノ諸兄ト合議シ互ニ相助ケテ諸兄ノ内兩三人神戸へ来リ玉フヤフ萬事相談ノ為メ態ト出港セリト云々終ニ大阪公会ノ執事高木玄真進テ云ク我ハ代理トシテ態ト出洋シ道ノ諸兄ニ対面シ且ツ進歩ノ景況ヲ直見シ實ニ感謝余リアリ然ルニ大阪府仏法繁昌ノ地ニシテ道ヲ聞ク者至テ少ナク安息日ニモ説法アリトイヘトモ来集ノ者モナカリシニ當春坪井兄（和歌山縣ノ士族ニシテ東京公会ノ徒タルニ大阪府福沢学校ノ教官ニ雇ハレ彼地ニ至リシ者ナリ）来ラレ大ニ尽力アリテ遂ニ当五月初メテ公会ヲ立テ唯今ニテ受洗礼入会ノ者十五人ナリ其外エビスコパリアン宗（コレハ耶蘇教中ノ別派ナリ）ノ教師モリス先生ノ方ニハ教多ノ人員アリ凡ソ五十人ト聞及ヘリ併シ乍ラコレハ別派ナレハ我公会ノ者ハワヅカ十五人追々堅固ニ基督ノ道ニ歩ミ終ニ坂府モ真ノ開化ニ至ラシメント昼夜祈願イタシ何卒諸兄ノ助ケヲ受ケ度存スルナリト此ノ高木ハ最早年齢モ四十余ニシテ元美濃大垣ノ者ニテ医ヲ業トスルヨシ今度ハ本職ヲサシテ此ガ為ニ横浜ニ來ルト云云サテ四公会ノ演説意リテ次ニ各会金銭ノ出納計算表ヲ披露シ其次ニ已來ノ傳道ニハ何スヘキ乎ノ談合種々多端（畧之）終ニ讚美ノ歌ヲ歌ヒ教師及ヒ巨魁ノ衆徒互ニ感謝ノ礼ヲ述ヘ來四月ノ集会ハ神戸ヲ会所ト定ムヘキ評決シテ退出ス

一 武州新座郡ヒケマタ村ハ昨年小川奥野ノ兩人巡回ノ節四五輩隨喜聴聞セントコロニテ其后折々東京ヘモ来リ教ヘフ信仰ノ体タルニ此頃別ニ求メテ東京公会中ヨリ一月ニ二度ツ、足勞シテ引立具レルヤフ申來当月ヨリ代リ代リ会中巨魁ノ徒出村ノツモリ又神奈川県下武州多摩郡砂川村堺弥兵衛ヨリモ前条ノ如ク申來レリ又千葉縣下總藤原新田^{東京ヨリ五里}ハ高橋享ノ旧里ニシテ此処ニモ当月ヨリ一兩度ツ、出席講義ノ約アリココニハ最早安川新作^{はとめ}安川一ト云ヘル者又武藤長二郎

ト云ヘル二人受洗礼ノ者アリテ其処ノ観音堂トカラ教場トセル由ナリ

一 十月四日安息日受洗礼十人於東京

遠州舘塚村住浜松縣士族	押山 復録
東京浅草並木	石井啓二郎
	啓二郎母 石井千代崙
同今戸町	久兵衛妻 須郷 とく
	同 娘 ゑい
同町	鈴木久治妻 鈴木 津や
	同 娘 同 あい
播州赤穂産東京浜町住	岡田 保鉄
長野縣士族海軍省出仕	世良田 亮
千葉縣下藤原新田	武藤長治郎

己上於東京築地タムソン授之

一 九月十二日於相州箱根受洗八人

足柄縣下山中駅	津田政左衛門
同	笹屋助右衛門
同 箱根駅	白井清太郎
同	小林 庄吉
同	横山 静
同	栗屋 乙吉
同	畑草屋太郎兵衛
同	同妻 しげ

己上横居留バラン授之

一 第一号ニ言上仕候三番町四十二番地権田某同居伊東庭竹葬式ノ義ニ付過日戸長ヨリ尋問アリ夫故有体申出タル処其後何ノ沙汰モコレナシレハ耶蘇教葬式即チ免許同様ナリ知テ咎メサルヲ以テ明カナリト云々

上来近々ノ情態粗奉言上矣也

明治七年十月

上

謀者某敬拜

〔註〕

この史料は全部毛筆書き無罫和紙で(以下の史料も同じ)、表紙に東京横浜耶蘇教事情第二号と書いてある。切支丹禁制高札撤廃以後の故か、正木護や安藤劉太郎の報告書のような「血涙拜上具」とか、邪教の展開に「御国難果シ不可測」とかいう激越な調子や悲壮感は見当らず、教会員同志の手紙のような穏かなものになっている。唯末尾の所に伊東(藤)庭竹の葬儀について、密告しているらしい箇所がある。本史料は第二号だが第五号が8年1月であり、第八号が8年3月であるところから推すと、大体1月に1度は報告書が出されていたようである。そうすると第一号は7年の9月に書かれているかもしれない。伊藤庭竹の葬儀は8月の24日であるから、第一号の報

告書により政府機関が動き出したと考えることも可能である(上に掲げた年表を参照されたい)。またもう一つ、日本基督公会について、外国の宣教師達が集まって公会規則審議の前に協議していることがわかる。この協議には阪神地区の宣教師も加わっている。後年の日本基督公会(無教派)が空中分解して教派主義の教会が出来て行く過程を考えると、7年10月1日2日の宣教師会議は他の史料をまっけて、教会史の中に位置づけられねばならない。又譯者は東京公会に籍をもっていたようである。何故なら、公会の総会の席上での東京公会小川義綏の報告内容は省略している。これはいつもの(定例の)報告で、東京公会の内情は詳細をつくしているからなのであろう。

史料2

東京耶蘇教事情第八号 明治八年三月

一 教師タムソン所轄ノ公会ニハ此迄鉄砲州内ニアル外国人ノ会堂ヲ借りテ講場トセシニ今度築地南小田原町十一番地ニ新クニ建築セント既ニ地形モ出来不日取懸レリ大工ノ請負ハ百五十円ナリ日本人ノ所有トシテ建ルノ会堂是レカ始ナリ

一 会則トシテ春秋両度惣教会ノ集議ノ前ニ各所ニ於テ各会ニ信徒一圓諸事ヲ議シ其決議ヲ持シテ各会ノ長老来会スルノ定則ナレハ東京ニテハ本月廿二日同廿五日両日集会セリ其日ノ有様ハ先ツ議長ヲタムソンニ定メ筆者ヲ北原ニ定メ次ニ聖書ヲ讀ミ祈禱ヲ終リテ昨秋已來總テ傳道ノ進歩人員ノ増加等并ニ会計表ヲ披露シ其次ニ長老一人執事二人書記一人ヲ選挙ス先長老ヲ入札セシニ仁村守三ニ落チタリ此者故アリテ固辞ス再ヒ入札シ二川一騰ニ落札セリ次ニ執事二人樺部漸北原義道ニ落チ書記一人竹尾忠男ニ定メリ其次ニ至リテ二川一騰ヲ兼伝道師ニ選ヒタリ是ニ由テ此会ノ役員ハ傳道教師兼長老二人小川義綏執事二人北原義道書記一人竹尾忠男傳道教師一人栗津高明合六人ナリ爰ニテ初日ノ会終ル次ニ廿五日ノ会ニハ議長筆者前ニ同シク比日ハ公会ノ規則ニ就テ会吏三職牧師長老ハ同權ノ者トスルカ又上下差アリトスルカ比ニ就テ余程ノ議論アリ又会中ノ政事会吏ニ属スルノ權アリトスル乎会吏ハ会中ノ僕トスル乎此ニ就テハ日本皇口ノ政體ニ符合セサルヘカラズトノ論起リテ終ニ一決セス後日ノ會議ニ殘シタリ

一 前条ノ如キ会衆ノ評議ヲ持シ来四月上旬神戸戸港ニ大会スル会則ノ順序ニシテ東京ヨリモ長老一人出頭スヘキ答ナレト故アリテ行カス万般横浜同盟ノ会ニ託シ横浜ヨリ長老奥野昌綱近日出帆ノ由ナリ

一 本月四日横浜神奈川両所ニテ受洗礼ノ者二十九人アリタリ一日ニシテ如是多人數ナルハ此度カ始ナリト皆々喜悅セリ

一 東京ニテ当時出講ノ從前五ヶ所ノ外ニ今日ヨリ下谷車坂四十番地原龍蔵ノ宅ニ毎月六ノ日桜田久保町赤松七兵衛ノ宅ニ毎安息日ノ晩都合七ヶ所出講スルモノハ小川義綏北原義道二川一騰ナリ其外栗津高明ハ私宅麻布食倉片町ニテ講義ヲ始メ当秋迄ニハ邸内ニ会堂ヲ築造ノ企ナリト

一 新栄町二丁目カルロデスノ会堂近頃余程盛ニシテタムソンノ教会ヲ離レテ彼レニ入リシ高橋享ハ今度長老トナリ殊ニ尽力シテ所々ニ奔走シ府下ニテ芝本郷亀井戸コウメ辺ニ出講場ヲ設ケシ由且彼レカ古郷下總藤原新田近在追々入教ノ者數多ナルヨシ

一 天主教カトリック其外耶蘇教中ノ諸派ヲ除キバラ、ルメス横浜タムソン、カルロデス東京四人ノ教会ニ属スル信徒今日マテ總計凡ソ二百五十七人アリ

〔註〕

諜者が誰れであるかはこの第八号でも明らかに出来ないが、ただ文中「長老ヲ入札センニ仁村守三ニ落チタリ此者故アリテ固辞ス」とあるから、どうも仁村守三がこの報告を書いているようには受け取れない。本史料は諜者報告だから自分なら自分に落ちたと書いても、支障が無いと思われるからである。

つぎにこの諜者報告にも日本基督公会の職制をめぐる論議がみえる。公会はこの時期に試練に立されていたのであったが、公会の基本的性格である長老主義も日本人信者には明らかでなく、牧師長老執事と会衆との関係を日本の政体に符合させよとの論まで起こっている。又カルロデス Carrothers Christopher の指導力が高まり、長老主義に同調する者がたとえば高橋享のように公会から転会している様子が認められる。公会は日本独自の無教派一致か教派主義かの岐路にいたことが良くわかる。この諜者はカルロデスの教会を外から眺めている書き方なので、公会に籍を置いていたように考えられる。

史料3

東京耶蘇教事情第十一号 明治八年六月

府下講教場ノ控

一 毎日曜日	午後二時ヨリ	築地小田原町三丁目拾一番地 礼拝堂
一 同日	午前九時ヨリ 午後四時ヨリ	鉄砲州明石町六番女学校 ヤンクメン館
一 同晩	第七時ヨリ	外桜田久保町二〇番地 神保真吉
一 同晩	同時ヨリ	浅草広小地創業社内 奥田某
一 毎日曜日 毎土——	午後八時ヨリ 午後二時ヨリ	麻布仲ノ町一八番地 栗津高明
一 毎土——	午後八時ヨリ	築地新栄町四丁目一番地 小川義綏
一 毎月一ノ日	午後一時ヨリ	深川佐賀町二ノ六開農社内 古川嘉兵衛
一 同断	午後三時ヨリ	本所大平町二ノ二 渡辺真八
一 毎月二ノ日	午後二時ヨリ	芝田町八ノ六 鈴木春山
一 毎月三ノ日	午後八字ヨリ	浅草並木町二十三番地 石井啓二郎
一 毎月五ノ日	午後二時ヨリ	靈岸島越前堀二丁目 中川嘉兵衛
一 毎月六ノ日	午前十時ヨリ	下谷下車坂町十八番地 原龍太郎
一 同断	午後二時ヨリ	根岸御院殿村一四五番地 橋愼一郎
一 毎月七ノ日	午後八時ヨリ	両口久松町十二番地 中島坤山
一 毎月八ノ日	午後八時ヨリ	八丁堀玉子新道 工道誠春
一 毎月九ノ日	午前十時ヨリ	浅草並木町大仏横町八 中村金太郎
一 同断	午後二時ヨリ	浅草山ノ宿町三〇 須郷久蔵
一 毎月 ^{十日} 二十四日	午後二時ヨリ	湯島梅園町五桑名旧知事 松平定敬
一 同断	午後五時ヨリ	小川町北神保町四石山基文邸内 竹尾忠良
一 毎月曜日 毎水曜日 毎金曜日	午前十時ヨリ	築地小田原町四ノ一〇 築地病院

以上二十ヶ所

席数凡八十一 但一ヶ月

一 去ル十九日ハ小田原町ニ新築セン礼拝堂ノ開講式アリ東京在留ノ教師并ニ信者ハ勿論横浜ヨリモ数多ノ教師来会シ其餘ノ聴衆群集市ヲナセリ其日ノ大略ハ先ツ始メニ教師ルメス祈禱ヲシ次ニ楽器ヲ鳴シテ讚美ヲ歌ヒ「次ニ小川義綏長老祈禱シ畢リテ又歌ヒ「次ニ教師フルヘッキ文部省御新約全書ヒープル十三章八節ヲ題トシテ耶蘇ハ神ノ徳ヲ備ヘテ世界ノ王マク主トナリテ現在在来ノ別ナク今モ正ニ在テ万民ヲ支配ス既ニ此日本耶蘇ノ支配下ニ属スルノ時至リテ如是弘法日日ニ盛ナル真ニ耶蘇ノ威力ナルノ旨意ヲ講セリ「次ニ教師バラ開堂式ノ祈禱文ヲ讀ム「次ニ教師タムソン英語ヲ以テ詩篇百二十二章ヲ題トシテ耶蘇教ニ於テ礼拝堂ヲ設クルノ因由ヲ述ヘ講義ス「次ニ横浜長老奥野昌綱日本初立ノ礼拝堂日本人の所有トス既ニ其基ヲ立ツ今日ヨリ勉メテ日本全口ニ及ホスハ我輩ノ急務ナル旨ヲ講説ス「次ニ音楽讃歌如前「終ニ教師ブララン感謝祈禱シ皆々退散セリ午後二字ニ始テ五時半ニ終ル

一 去ル廿三日教会中集集シテ礼拝堂建築ニツキ会計出納并ニ已後維持ノ方法ヲ議ス建築ノ失費九百四十円余内二百九十円日本信者ヨリ出シ残り六百五十円外口人ヨリ出ス已来月々五円四十銭ノ地代ハ信者ノ募金中ヨリ払フベシト且鈴木久兵衛石井啓二郎ノ兩人ヲ以テ礼拝堂ノ世話掛ト定メ事務ヲ託シタリ

一 英国伝道教師フワールズ米口伝道師独逸人ブッチャル御口人「中村正直「津田仙「岸田吟香杉山孫六并ニ「古川某ノ教人訓育社ト称スル一社ヲ結ビ日本ノ假名文字ヲ少シ筆格ヲ替ヘテ盲人ヲシテ讀書セシムルノ事ヲ起サントノ社ニシテ今規則ヲ編ムノ時ナリ追々其人數ヲ募集セント尽力セリ右外口兩人ノ趣旨ハ専ラ教法ヲ敷クノ一助トラン為ニシテ彼口伝道会社ヨリモ幾多ノ金ヲ送ルヘシト云云

一 去ヌル四月十日出立シテ新潟ニ行キシ英国伝道師兼医バームハ彼地ニテ盛シニ盡カシ横浜公会ノ一人雨森信成ト云フモノ彼ニ随從シ講義ヲ助ケテ伝道セル由或日一人ノ聴衆雨森信成ノ壇上ノ講話ヲ聞キ大ニ怒リテ雨森ヲ引ヲロシ書物ヲ奪ヒ乱暴セルニ邏卒来リテ取押タリト其後県会ヨリ勝手ニ聴講イタス可シトノ告令アリテ益々盛シニシテ毎席八九十人モ来集スレハ説者乏シク何卒東京横浜ノ教会ヨリ一兩人来リ呉レヨトノ報知ニテ既ニ横浜ヨリ牧六三郎過日出立セリ

一 青森県広岩ニテモ追々盛シニシテ既ニ一教会ヲ立テ受洗禮ノ者十四人アリ追々信仰ノ者数多ナリト報知アリ

〔註〕

史料3は会堂の他で行なわれた集会の様子について詳しいので、8年6月当時の教会の事情がよくわかり、又大学南校の教頭をも歴任したフルベッキの説教要旨を今日に残している。ヘブル人への手紙13章8節は「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない」であり、フルベッキがこれに基づいて王なるキリストを説いて日本に教が許され、信仰につく者の増加したのは、神の力と語っている。又文中中村正直等の訓育社にふれ、盲人伝道や盲人の福祉のために点字の考案を始めたことを伝えている。

史料4

東京耶蘇教事情 明治八年一月第五号

<国会図書館憲政資料室所蔵三条家文書>

※この史料は史料1～3の耶蘇教徒取調一件書類中のものではないが、同一謀者の報告の一部分なので合わせてこの機会に紹介する。

一 昨戌年十二月十七日耶蘇教葬送ノ事ニツキ東京府ニ出願ノ書面同廿八日北原義道ヲ府廳ニ召サレ右ノ書面教部省ニ差出シタルニ此條ハ聞届ケ難シトテ下リシ由口達ニテ書面差戻サレタリ此ニ依テ今度ハ正院ヘ直願致ス可ク御用初目ヲ待ツトコロニ不図公會條例ノ事ニ就キ議論差起リ其故ハ今東京横濱ニ立ツル所ノ教會ハ彼ノ歐米各國ニ現在スル宗派ヲ別立スルモノニ非スシテ日本基督ノ會ト名ケテ彼ノ諸派ヲ合併セルモノナリトシテ設立セル所ロニ此頃諸派ノ傳道師各自ノ宗派ニ随テ教會ヲ立テシモアリ又將ニ立テントスルノ勢モアレハ今ノ合一ノ本意モ遂ケ難ク寧ロ彼レカ宗派ニ属シテ彼カ助ケヲ受ケント乞ハ、彼ノ本會ヨリモ金ヲ贈リ人ヲ遣ハシ早ク此會ヲ盛大ニスベシト又或説ニハ強テ助ケヲ望ミ彼ノ宗派ニ属サハ各國ノ宗旨ヲ日本ニ移スノ理ナレハ日本政府ニ對シ宗旨ヲ外國ヨリ取ル、當レリ今ハ唯其教ヲ取りテ日本獨立ノ會トスル事其益殊ニ多シト夫ニ就テ會吏ヲ退ケント謀ル者アリ少シク私情ノ論ニテ沸騰最中ニテ右出願モ今日マデ遅延セリ何レ此事形付次第書面ニテ出願スベシト云云

一 教師タムソンハ米國ミニストルノ譯官トナレリ就テハ司法省十一等出仕高橋享ハ官ヲ辭シテ右タムソンノ付屬トナリ其實耶蘇教傳道ヲ專ラトシテ給ヲタムソンヨリ受クルノ約定已ニ頃日病氣届ヲイタシ教法ノ為ニ官途ヲ去ルノ覚悟ナリ

一 常州アンナカノ士新嵐^ニ恸^ニ御准新際支那ニ脱走シ夫ヨリ米利加國ニ渡リ耶蘇教ノ信者ニ助ケラレ彼地ニテ学行昇達シ今度耶蘇教師ノ免許ヲ取り日本傳道ノ為ニ遣ハレ昨十一月廿六日帰朝横濱ニ着シ夫ヨリ故郷ニ歸リ此節東京ニ在テ當月三日安息日ニハ築地會堂ニテ説法セリ其實大坂ニ居ヲ構ヘ傳道ヲ務ム可ク亞米利加本會ヨリ命セラレン由シ近日彼地ニ至ルトノ事ナリ

一 本月三日の安息日ヲ初日トシテ一七日間例年ノ祈禱式在テ毎日午後三時ヨリ會衆一同會堂ニ集リ左ノ條目ノ要旨ニ依テ祈禱セリ

三日聖靈ノ降臨

四日神恩感謝

五日教師傳道ノ為ニ輔成アルヲ殊ニ我邦ニ利達アルヲ

六日帝王執政及ヒ文武諸有司ノタメ教法ノ自由ニ行ハル、タメ基督ノ徒迫害ヲ受タル者ノ為メ

七日各人ノ家族ト学校等ニテ基督ノ道ヲ子弟ニ教育スルヲ并ニ出版新聞等ニ於テ真理ヲ進ムル

ヲ

八日基督ノ徒ノ一致和平ト人々救主ニ習フテ清潔ニ歸スルヲ望ムヲ

九日猶太人回々教及ヒ不信者又タ都テ異端ヲ教ユル人ノ為メ

十日我々ノ主耶蘇ノ速カニ来リ玉ハンヲ

一 米國フレスビリアン派ノ教師カルロデスノ公會中ニテ八人ヲ選ヒ後來教師ト為ス人ヲ教授スルヲ始メシ由シ

- 一 エピスコパリアン派教師ウリヤムス外三人ト共ニ築地入船町ニ住シ教場ヲ設ケ毎夜説法アリ
 一 本月三日安息日日本公會ニ入りタムソンヨリ洗礼ヲ受ケシ者六人アリ

東京麻布宮村町	土屋 茂平
東京府士族	戸川 安宅
静岡縣士族竹尾忠男母	竹尾 永 ^{ヒサ}
千葉縣士族高橋享叔母	高橋 は満
千葉縣下藤原新田	植草 きく
愛媛縣下櫛部漸妻	櫛部 つね

- 一 過日静岡ヨリ報知アリ彼地ニマクド子ルト云ヘル教師昨春己来居留セルニ此頃洗禮ヲ授ケン者十九人アルヨシ

〔註〕

三条家文書にあった史料4は史料2よりももっと具体的に、日本基督公会内部の日本独自の公会制度をめぐる討論を明らかにしている。教派主義に属することに現実的な利益を感じつつ、

①素朴な、神学とも呼べない神学の立場から

②日本政府に対し、基督教会が日本側の主体性を持っていないように思われるのを阻止するの二側面から教派主義に反対している様子が見える。特に第二の側面は今迄いかなる資料にも出て来なかったものなので、特に注目に値する。又、史料1にある伊藤庭竹の葬儀の件にも言及しこの事件が教部省東京府の問題になっている事を語っているが、この事件はタムソンを介してアメリカ公使館の問題ともなり、この後外交問題と化している。

本史料紹介にあたって、藤井貞文先生、小沢三郎氏の御指導を受けた。又宮内庁書陵部、東京女子大学比較文化研究所のお世話になった。付記して感謝する。

※本史料原本は縦書であるが、紀要編集の申し合わせにより横書とした。